

中村健治先生のご逝去を悼む

兵庫医科大学 名誉教授
廣田省三

さる令和6年4月9日に、日本IVR学会の重鎮である中村健治先生が療養中の血液病で鬼籍に入られました。教えを請うた先輩としてまた友人として長くお付き合いさせていただいた私にとって、誠に断腸の思い、痛恨の極みであります。先生は、日本IVRの創成期から若手IVR医の旗頭として技術、学問をリードしてこられました。私が卒後10年頃に、先生に声をかけていただき、IVRを議論する仲間にしていただきました。以来40年以上公私ともにお付き合いがあることから、追悼文の依頼を受けました。

数ある思い出のうちのいくつかを紹介させていただき、先生のご逝去を悼みたいと思います。

日本でIVRを劇的に知らせたのは、1978年頃、山田龍作先生が指導する大阪市立大グループによる肝癌に対する動脈塞栓術の先進的試みとその素晴らしい成績の発表で、まさに快挙でした。それまで原発性肝癌は6ヵ月生存率0%とされていたものが、5年生存率40%まで向上したのです。この画期的な治療手技を日本から世界に発信したことで、血管造影をしていた放射線科医を奮い立

たせ、以後の日本IVRの発展の基を作ったのでした。そのグループの中心にいたのが中村先生、中塚春樹先生で、それ以降はバッド・キアリ症候群の穿破開通術やTIPSなど門脈圧亢進症のIVRで先駆的業績を挙げられ、日本のIVRのパイオニアとして世界的にも活躍され、重鎮として晩年まで活躍されました。

また、日本IVR学会理事として長く活躍され、2009年に大会長として大阪南港ハイアットリージェンシー大阪(現・グランドプリンスホテル大阪ベイ)で学会総会を主催されました。その際の大会長挨拶でご苦勞を思い出されたのでしょうか、感極まって涙されていたのが印象的でした。

また、大学同士が競い合うというよりはいがみ合っていた時代に、若手同士で意見交換してお互い向上しようと声をかけ、関西のIVRの若手グループ勉強会を立ち上げられたのも先生でした。

先生はたくさんの友人に恵まれていました。天性の明るさとおおらかさをお持ちで、その関西弁の楽しい語り口から人が集まってくるのでした。また、長身でスマートな体軀、やや長めの髪でい



忘年会(2023年11月)左より中村、坂本、古井各先生、一人おいて古井先生奥様、廣田



仲の良い先輩と 2018年
(左から坂本, 岡崎, 中村各先生, 廣田)

つもタバコを口にくわえている姿は龍馬を連想させ、先生の魅力の一つでした。お酒も嗜まれ、研究会終了後には大学関係なしに皆で宴会を楽しみました。ゴルフも大好きで皆でIVRの友達とよく遊んだものです。先生はスインガーでまたロングヒッターでした。昨日のこのように笑顔が思い出されます。趣味の木彫り仏像は実に素晴らしく、指、爪まで精緻に彫られ、初めて見たときは見事さに唖然とすると同時に先生の思想の奥深さを感じました。おおらかに見えて、打ち込んだものに対しては、実に深く考え、材料を見極め、細部にこだわり丁寧に仕事をされます。時々、先生は“こういうのは、これ以上突っ込んだらあかんねん。僕の経験やけど。”と処世の深奥、奥義を語られました。

また、優しさは色んなところで感じるのですが、坂本 力先生が病気になられた時、薬師如来像を彫り病気の快癒を祈願しその像を贈られたと聞きます。私も教授就任時に手作りの紫檀の木でできた名刺入れをいただきました。

先生は若い時に東京の日赤病院で研修されたことがあり、その時代に関東の多くの先生と知己になっておられました。友人のお一人の慶應の栗林幸夫先生が関西の国立循環器病センターに赴任されたのを機会に、勉強とゴルフを一緒にする若手の会を作ろうと声をかけ、磯部義憲先生、蘆田 浩先生、原田潤太先生、淀野 啓先生、吉岡哲也先生



大阪市大の先生達と 2011年 仙台

など多くの先生が参加するゴルフコンペを長年続け、そして友情を育みました。その成果は学問にも現れ、栗林先生、吉岡先生、小生と4人で編集して『IVRマニュアル』(医学書院)という本を上梓しました。晩年、先生は自分の大事な遺産の一つと語っておられました。この4月に改訂3版が出たのを見ずに亡くなられたのが残念です。

また、古井 滋先生、岡崎正敏先生、坂本先生らと20年続けられた北海道ゴルフツアーも、最後の年は体調を考慮され参加されませんでした。昨年11月に先生を交え、坂本先生、古井先生ご夫妻、小生とで会食の機会を持ちました。その時の生前最後の写真を添付します。(廣田が関与した写真ばかりで申し訳ありません。)この1ヵ月後に先生が慕っておられた坂本先生も急逝されました。

亡くなられる10日ほど前に電話で体調を尋ねると、“今入院中やけど、血液データが良くないんや。体は普通やから明日か明後日退院するわ。僕が先やと思っていたのに力さんが先に逝ってしもた。坂本先生の墓参りも一緒に行こうか。それと、遺言も書いたし、嫁はんのことも息子たちに頼んだ。後顧の憂いはない。”とさっぱりとした口調で述べられたのが最後の私との会話でした。今、只々深い悲しみの底にあり、寂寥感に押し潰されそうです。

さよなら先生。天国でも好きな煙草を存分に楽しんでゆっくりしてください。

合掌。